

## 第3回 市町村・公民館等職員専門研修 実施レポート

日時：令和7年10月1日（水） 参加者：6名（うち市町村から5名）

会場：秋田県生涯学習センター 講堂

県内の生涯学習・社会教育関係職員や公民館、市民センター等の社会教育施設の職員に求められる資質や力量を高めることを目的として、今年度3回目の研修を行いました。テーマは「障害者理解に向けて～障害者の生涯学習支援を考える～」です。

### 【講話】

始めは、第24回日本ボッチャ選手権大会出場選手である**齊藤悠人氏**が「誰もが『当たり前』を享受できる社会へ」と題して講話を行いました。齊藤氏は、ボッチャとの出会いや魅力について語るとともに、車椅子ユーザーにとってのバリアや制約、合理的配慮、社会的障壁、ポータレス等についての話題を提供し、手伝いや助けを必要としている側の意見を聞くことに配慮してほしいと話されました。最後に、森見登美彦氏の「熱帯」の一文を引用し、当研修が「こころの障壁」を和らげるきっかけとなることを願って、講話を締めくくりました。



### 【ワークショップ】

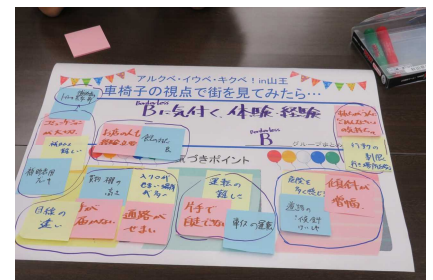
午前の後半から午後にかけては、秋田県生涯学習センター社会教育主事の**佐々木 克巳**のファシリテートによるワークショップ、「アルクベ・イウベ・キクベ in 山王～車椅子の視点で街歩き体験」を行いました。

参加者は2つのグループに分かれ、9つのミッションが書かれたビンゴカードを見ながら、クリアしていく順番等を話し合いました。そして、実際に車椅子による街歩きに出掛け、次のような体験をしました。



- ・ 所内のスロープを自力で上ったり下ったりする
- ・ 横断歩道や歩道の段差、グレーチングなど、車椅子で通行する上で危険な箇所を確かめ、撮影する
- ・ コンビニエンスストアに入り、買い物をする
- ・ 食堂に入り、昼食をとる

このような体験を通して、各々車椅子ユーザーが感じ取ると思われる様々な視点をつかんだようでした。



さらに、街歩き終了後は、各グループのメンバーが体験を通して気付いたことを付箋に書き、補足説明しながらそれぞれの意見を共有しました。どちらのグループも多くの付箋が貼られ、活発な話し合いが展開されました。そして、車椅子から街を見てみてどうだったか、各グループで「まとめの一言」を考えました。それぞれから「B（Borderless）に気付く体験・経験をすることができた」「利用者の声を聞く機会を設けることが大切だと思った」との発表があり、参加者にとって収穫の多い体験となったことがうかがえました。

最後にファシリテーターの佐々木から、「今回は、車椅子の視点で活動が進められたが、そのほかの障害のある方の視点や障害が無くても生きづらさを抱えている方の視点などもある。これからも体験を通して多様な視点を増やしてほしい」と参加者へのメッセージが伝えられ、本研修は締めくくられました。

### 【参加者アンケートより】（抜粋）

- ・ 講師のお話の中で、バリアフリーというワードが当たり前になりつつある今であっても、フラットな状態で楽しめない、モヤモヤ感が残る場面があることが印象的だった。
- ・ ワークショップの車椅子体験では、乗ってしないとわからないことが多かった。路面の傾きが大きく感じられることなど、気付きの多い研修だった。